

松蔭浩之



まつかげひろゆき：
アーティスト。1965
年福岡生まれ。88
年大阪芸術大学卒
業。個展を中心に
国内外で活動。写真、グラフィッ
クデザイン、ライターなど幅広く手
掛け。アート集団「昭和40年会」
宇治野宗輝とのロック・デュオ「ゴ
ージャラス」での音楽活動でも知
られる。



Self portrait 2001---- Hiroyuki Matsukage 2001

白と黒のセルフポートレート

5年ほど前から学生の前に立つ機会が増えている。レクチャーやワークショップの類はもちろん、特別講師として美術学校に招かれて、先生顔でみっちり授業することもある。「現役で活動するアーティストが教職に就くというのはいかがなものか？」という懐疑的スタンスを一貫してきたオレだった。『作品だけやと食べていかれへんから、講師の口を探してるんや』的な情けない諸先輩たちへの決別の意志から！なんて大仰な発言はここでは控えるとしても、相手はまだ20歳そこそこの若者たちだ。気心や価値観の知れたいっぱしのディレクターや作家同士とワイワイ討議するのはケタが違って退屈極まりないだろう。創作のかたわら先生業をやっている友人などに聞けば、「初心にもどれるよ」とか、「彼ら思いがけない発想をたまにするんだよね」と口を揃えたような詭弁の羅列。こっちは、いまだ前へ前への勢いでキレツな発想が泉のように湧いて止まらないのだからそんなもの必要はない。さらに学生の仕事は「大人のアラ探し」。若さは無慈悲だ。先達者をシリアスに観察しては、「イケてる/ダサイ」の両極端な判断基準でザックリ切り裂く。負けるものかと思いついて、自分のキャリアや年輪刻んだその成果を懇切丁寧に教授してあげようなどと心高ぶれば即自滅。遅刻常習者、寝ぼけ眼と半開きの口元ボカーンを前に、結局、「オレが学生の時はああじゃなかった、今の若いもんは！」と恥づかしい常套句が飛び出しそうになり、急いで口を押さえるのが関の山？ とそんな警戒心。ここは自己防衛の策としても、先生だけはやるまいと心に決めていたのである。ところが学校側は、「現役ならではのリアルな現場の声を学生たちに伝えてもらいたいです！」なんて力説なさる。そう言われるとそれで、ああ、なんだそういう考え方もあるのかと素直にいくつかの教壇に立つことにあいなったのである。

DTPデザインのノウハウやコンピュータの仕組みや使用法は他の先生にお任せして、オレの授業は、基本的に物づくりの心構えや、表現発想論的なメンタルトレーニング。さらに自分自身が確信と責任をもって指導できるものをと考慮したうえで、『セルフポートレイトを使ったデザイン』というところに落ち着いている。最近の男子学生は、「3DCGでPVとかVJ」がイケてて、女子だと「イラストレーターになって雑誌に載りたい」ってのが圧倒的に多い。

そんな彼らの前に立ち、実に落ち着いた大人の態度と声色を演出しつつ、「我が師曰く、『人間とは演技する動物である。演じることで自分の望むそれになる』。さあ、自分自身を素材にして、徹底的にいじくりまわしてみよう～私には何があるのか～私には何がないのか～そして私とはいったい何者か？ それらの考察のもとセルフポートレイトを制作して、CDジャケットというフォーマット内にデザイン後提出するべし」と強気に出ると、「なんか……気分分で……」ちよろつと描いてみたりマックをいじったりしたい彼らは、のっけから「私/私/私」と言われてもまあと困惑の様子。実際提出される作品の多くには、「本当の自分」という気分で、裸になったポートレイト。「素顔のままの私」というこれも安直な気分のみのスピンの顔写真。「彼氏の前の私こそ素直な私」に至っては目も当てられない、ボーイフレンドにカメラを渡してピースサインのニコパチフォト。もっといぶかしいのは、「ちっちゃいころの私?」……っておい！ お前らこれからだって時に自分の赤ん坊の時の写真貼っつけてどうすんだよ！ と激昂したくなる。タレント気取りか、誰が普通にテレビ観てゲームやってマンガ読んで雑誌の情報眺めたくらいの若僧の気分なんか感動するかつつの？！

生きていく過程でもっとも肝心なのは、世界が、『私』と『私以外』のたった2つで構成されているということを知ることだ。表現者ならばなおさらだろう。そこでまず、セルフポートレイトという取り組みを通して「己を知る」ことが、何よりも表現の領域にダイブするための最良のライセンスになるということを知ってもらいたいのだが……「己を知る」というよりはむしろ、「己の癖 弱点と言ってもいいかもしれない」を検証分析し、そして認知理解すること。さらにそこから先のステップとして、それを拡大して表出させること、そう「勇気」を持つことが不可欠。ただ上っ面をなぞったようなええカッコいいでは、永續きはしないし、ましてや人に感動を与えることなど不可能だ。ウィークポイントも全部ひっくるめて、徹底的に自分を愛する術を身につける、さらにその自分をいつでも突き放してみる残虐性をも持ち合わせることができなければ、何も始まらない。疑うことなかれ、古今東西の優れた芸術家は皆、究極の自己愛の王様なのだから……。

(次号につづく)



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp